



新歌舞伎座元年

会員 小野田 峻 (64期)



とりあえずは「勸進帳」

「旅の衣は篠懸の 旅の衣は篠懸の 露けき袖やし
をるらん」

歌舞伎十八番の内「勸進帳」の謡ガカリ（冒頭）である。

続いて演奏される、居並ぶ長唄囃子連中のユニゾンを聞くたびに、私は、歌舞伎観劇の世界に足を踏み入れて良かったとしみじみと感じる。私が本格的に歌舞伎にはまっていたのは21歳かそこらで、あれからもう10年ほどが経つが、思えばそのきっかけも「勸進帳」だった。その意味で、昨年（2012年）10月、歌舞伎の代表作ともいえるこの演目を12代目市川團十郎、9代目松本幸四郎、4代目坂田藤十郎という、歌舞伎ファンからすれば奇跡ともいえる歴史的な座組で観劇することができたことは、私の歌舞伎観劇人生にとって大きな節目となった。

ところで、歌舞伎って面白いの？

さて、今年（2013年）は、新歌舞伎座元年である。

約3年の建て替え工事を経て生まれ変わった歌舞伎座は、1889年開設の第1期から数えると第5期にあたる（第4期は、1951年1月から2010年4月）。4月2日から1年間の予定でこけら落とし公演が行われているが、とくに4月から3か月間の公演は感慨深いものがあった。5代目中村富十郎、7代目中村芝翫、4代目中村雀右衛門、18代目中村勘三郎、そして12代目市川團十郎までもが、新歌舞伎座の舞台に立たずしてこの世を去ってしまったからである。もちろん、私のような若輩者はこれら希代の名優を語れるような観劇歴を有しないが、脈々と受け継がれる芸術を宿命として背負う若い世代の歌舞伎役者を想うとき、同じ時代同じ国に

生きる者として、大きな時間の流れの中に自分の身命を置いてみたりもするのである。

とはいえ、歌舞伎観劇にはそんな小難しいことは必要ない。役者の名前を知らなくても、外題が読めなくても、歌舞伎の知識が全くなくても、歌舞伎観劇は十分に面白い。

私が劇場の外でも内でもたびたび尋ねられるのは「なぜその歳で歌舞伎が好きなの？」という台詞。私からしてみれば「世の中の人なぜそんなに〇〇が好きな？」と問い返したくなるようなものが巷に溢れているが、そこは素直に、こう答えるようにしている。

「歌舞伎は何でもアリだから面白いんです」と。

歌舞伎は、リアリティを追求するものでも、人生の深奥に触れようとするものでもない。業と欲と血にまみれたこの世のすべてをこった煮にして、無理やりにも娯楽に昇華させようとする営みである（今のところ、私はそう思っている）。

せっかく東京にいるのなら

歌舞伎を知ったその日から、私にとってのヒーローは12代目市川團十郎さんだった。

その團十郎さんの辞世の句。

「色は空 空は色との 時なき世へ」

私はこれを詠んだとき、團十郎さんが到達していたであろう思想の深遠さに、眩暈がした。

そんな團十郎さんが身命をかけて打ち込んだ歌舞伎を、私はこれからも観続けたいと思っている。これを読んでくださった方々も、せっかく東京におられるのなら、銀座四丁目の新歌舞伎座で、歌舞伎がどれくらい「何でもアリ」なのかをご覧いただければと思う。